

岩手県九戸郡野田産 Ammonite に就いて

横 田 幸 八

On the *Ammonite* Found in Noda Village,

Kunohe District, Iwate Prefecture

Kōhachi YOKOTA

1

Ammonite は Mesozoic Era に於ける Standard Fossils である。Ammonite の化石は Palaeozoic Era にも稀に発見されるが、Mesozoic Era に於いて、その繁栄の Acme に達している。そこでその種類も、その数も頗る多く、且、世界各地に分布している。

兎が、Cainozoic Era の Palaeocene になると全く、その姿を見せないものである。だから Ammonite を産する地層は Mesozoic Era のものであると決定づけられ、且、Mesozoic Era の Standard Fossils とされている所以である。

Mesozoic Era は Ammonite の棲息に最適な自然環境にあつたことは否定出来ない。然し、その自然環境も漸移性をもつて変化したもののである。そこで、その影響性が、Ammonite の生態性に直接影響してあるのも当然である。その最も顕著なものの一つとして知られてあるのが、Suture line の変化である。最初は極めて簡単な波状の曲線であるが、漸次複雑化して最後は、第 8 図に見る様な模様状を呈するにいたつている。この Suture line というのは Ammonite の体空内の隔壁が外殻にあらわれたものであつて、進化するにつれて各種の生態的機能も複雑化して分業的となり、多くの室に分れたものと考えることが出来る。最も単純なものは Mesozoic Era の最も古い Triassic Period の最下部より Cythic Ladinic, Rhoetic, Jurassic Period では最下部より Black Jura Brown Jura White Jura

と漸次複雑化しているようである。然し Ammonite の黄金時代といわれているのは、Mesozoic Era の最も新しい Cretaceous Period であつて、下部の Neo Comian から、その上の Cenomanian をして最上位の Lenonian と層序がなつている。この Lenonian には、第 6 図に見るように複雑な模様状を呈している。

以上の時代区布は単に Ammonite の Suture line の変化によつてのみ決定されるものではなく、水成岩石の種類や、変動の状態や、其他の Fossils によつて総合的に決定づけられたものであることは勿論である。

2

Ammonite は、今日熱帯の海洋中に現存する鸚鵡貝やタコブネなどと同じ類の所謂頭足類の貝類である。第 7 図はよくこれを示している。かくの如き偉大なものが、しかも、世界各地より殆んど破壊されることなく保存されて生産するという事は、一つの驚異でもある。これは Mesozoic Era の静穏性を物語る証拠である。Mesozoic Era は過激な変革と激動的な運動に支配された Palaeozoic Era や Cainozoic Era とは比較出来ないほど、静穏性と緩慢性とによつて地層が構築され、生物もおだやかに充分成長したものである。だから地質時代の泰平期とも称されるわけである。

第 2 図に見るように整合性が特徴でもある。岩質は概ね石灰岩・白雲岩・頁岩・泥灰岩・粘板岩・砂岩・礫岩、時には石膏・岩塩・石炭等

の成層性を形成する所もある。

3

岩手県の東北端を占める地域が九戸郡で、その南部海岸に面した村が野田村である。野田湾というのは、三崎・真崎間をいう場合と、三崎・堀内間をいう場合と、十府浦だけをいう場合とがある。こゝでは、三崎・堀内間を指すことにする。

三陸海岸の北部には、田山博士の研究による海岸段丘が卓越してある。第1図のCが、第4図の写真Cで実にみごとである。この東端は断層崖であつて、第1図Bの位置が、第4図写真のB点である。こゝは白堊の地層が断層崖となつて紺碧の海面に浮かんでいる。第2図写真は玉川断層崖の北端である。

この断層崖は、真崎までつづき海岸段丘の東端である。第2図のA点の北端が、第2図写真のA₁であり、第3図写真A₂はA₁のすぐ南につづくものである。A₁は白堊の水平層の整合面を示し、A₂は *Ammonite* を包蔵してあつた位置を示したものである。即ち、直立せる人は採集者であり、この人の頭の位置にあつたのである。

第1図に於いて、断層崖C・B間に個性豊かな久喜の海岸がある。B・A間は十府浦とよぶ野田の海岸で砂浜の連続であり、防潮林を背後とする海水浴場でもある。太平洋戦争中は第5図に見るような製塩の竈が建てられて、時ならぬ製塩街をつくり、野田塩の声価をあげた所でもあるが今はその面影さえない。

玉川断層崖は殆んど水平で下部は砂質粘板岩、その上に5m余の粘板岩、2m~3mの頁岩、12m~14mの大礫を含む砂質泥板岩である。これ等の地層はいずれも整合性であるので、沈積当時の静穏性を窺知するに充分である。この断層崖下の玉川部落には長貝の堆積層が露出している。

4

第1図A点、第2、3図写真地域の断層崖下には、小豆大の美しい小石が磯浪に洗われてい

る。地方人はこゝをアツイ海岸とよんでいる。アヅキ海岸よりの転化ならんとも考えられる。又、この海岸には食糧としている巻貝が多く収穫される。これをツブとよんでいる。ツブがとれるからであらう。だからアツイのことを別にツブタともよんでいる。*Ammonite* はツブに似ているというところから、地方人はツブの親を発見したなどいっている。まづたく諧謔的である。

この地域は八戸線の終駅久慈駅よりでる普代行の国営バスが停留所とする。陸中米田のすぐそばである。化石の発見はこの米田部落の米田源吉氏である。氏は半農半漁の職業をもっている。昭和24年アイオン颱風のあと漁漁の帰路、ツブタよりこれを発見し自宅に持参しておいたものである。その後久慈町に催された展覧会に出品して人目をひき、その後は野田村農業協同組合の土間に置かれてあつたのを筆者が玉川地域調査の際これを知り、当学研究室に持参せるものである。

5

第6図は当学所有の *Ammonite* の写真である。厚さ27cm 直径59cm 重さ155kg 巻方は左巻で、三巻である。中心部及二巻面には Suture line が見事に出ている。この一部を実物大にしたのが、第8図である。この *Ammonite* は Cretaceous Period の最上部を占める Senonian 時代のもとも推測される。それは早坂博士⁽¹⁾による *Pachydiscus* と殆んど等しいからである。Monobe-gawa Valley 産の Cenomanian 時代の *Puzosia denisoniana* にも極似する⁽²⁾。そこで *Ammonite* には多くの種類があるが、野田産のものは Cenomanian から Senonian にわたつて彫盛を極めた北海道産と同種の *Pachydiscus* であろうと推測される。

次にこの化石のよさは、頭足類であるということをも明瞭に示してあることである。即ち、タコやイカの類であるから、その脚の太さなどを察知することの出来るまで完全である点である。又 Suture line が中心部より遠いところでは

模様状ではなく縞状になつて起伏あることも、このものの生態性の変化を究明する好材料たりうるものである。

6

この *Ammonite* の発見によつて地質学者が主張して来た九戸海岸の地層が、Cretaceous Period のものであることや、北海道と連続的構造をもつているということを明確に実証する好材料たることを示すものである。

最後にこの化石を当学の研究室に贈らるゝまでに御高配下さつた小田賢太郎氏・小田まき氏・小田実美氏・小田照夫氏・米田源吉氏等に対し謝意を表するものである。

註：(1)早坂一郎 日本地史の研究 p.84-p.151.

(2)東北帝國大學理學部地質學古生物學教室編 日本標準化石圖。

参 考 文 献

- | | |
|-------|-----------------------|
| 早坂一郎 | 日本地史の研究 |
| 佐藤傳藏 | 地質學提要 |
| 高橋純一 | 地理學通論Ⅱ |
| 小林貞一 | 日本の地体構造論 |
| 田山利三郎 | 北上山地東斜面の海岸段
丘に就いて |
| 山口貞夫 | 東北日本太平洋岸の海岸
断面に就いて |
| 藤本治義 | 地理學講座 第5篇 地質 |

A B S T R A C T

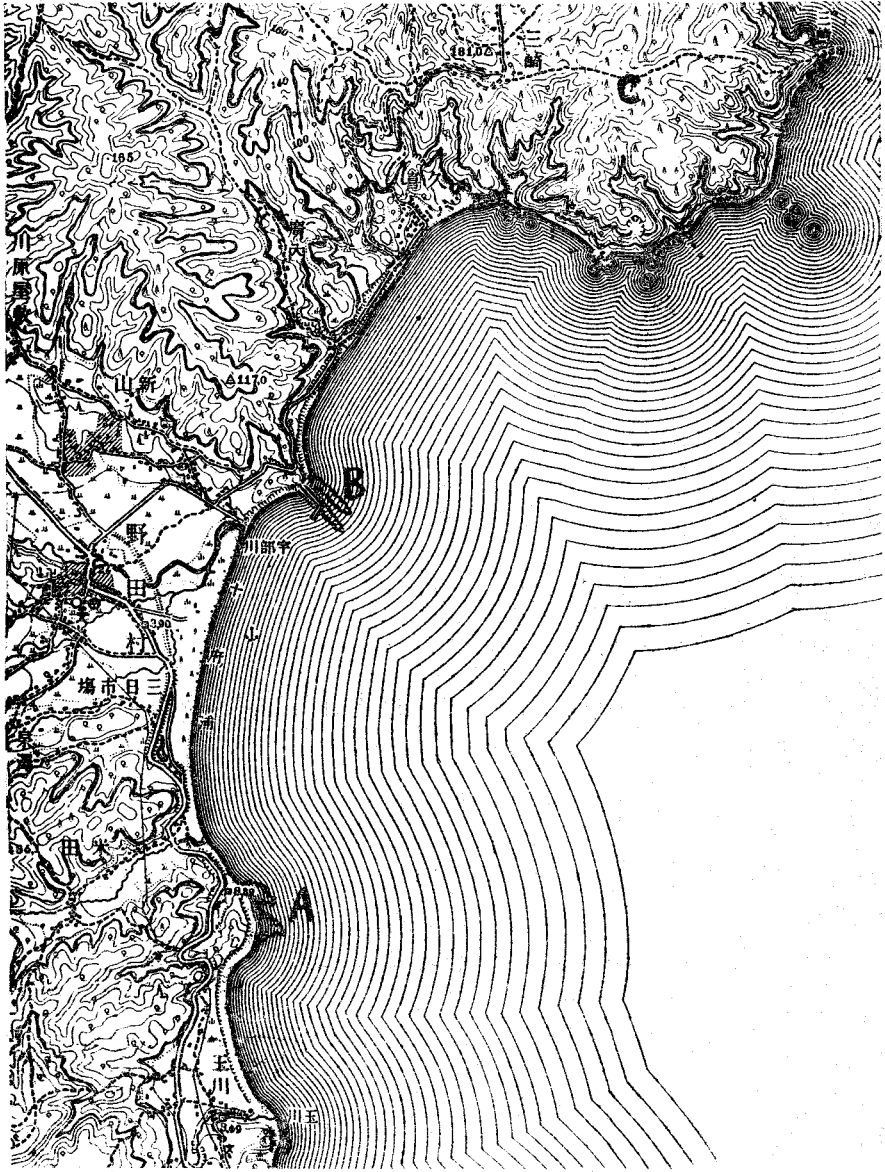
As the *Ammonite* had reached the highest point of perfection on the large scale in the Cretaceous Period of the Mesozoic Era, numerous kinds are distributed all over the world. And so they are regarded as the standard fossils of the Mesozoic Era.

Those fossils were found in the chalk-bed when the coast fault scarp in Noda Village, Kunohe District, Iwate Prefecture was disintegrated by the storm in sept. 1949 and each fossil is 27 centimeters in thickness 59 centimeters in diameter and

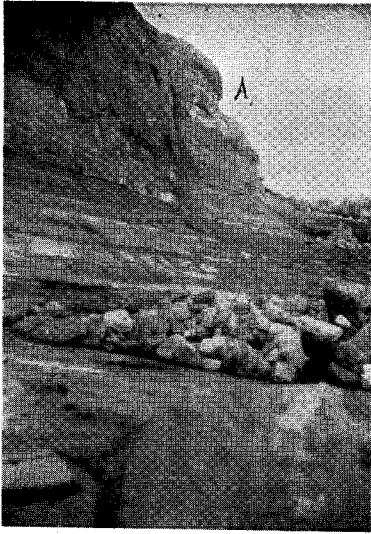
weighs 115 kilograms and has wonderful suture lines on its surface.

They have the same features as *Puzosia denisoniana* of Cenomanian and as *Pachydiscus* of Senonian.

But stratigraphically speaking, I think that they are just the same kind as *Pachydiscus* in Hokkaidō. Therefore this finding of those fossils brings an evidence to corroborate my belief that the coast region in Kunohe consists of the stratum in the Cretaceous Period and is connected with the stratum in Hokkaidō.



第 1 図 野田湾岸地域 $\left(\frac{1}{50,000}\right)$



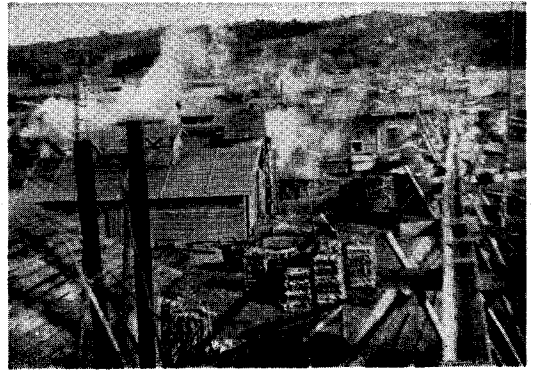
2



4

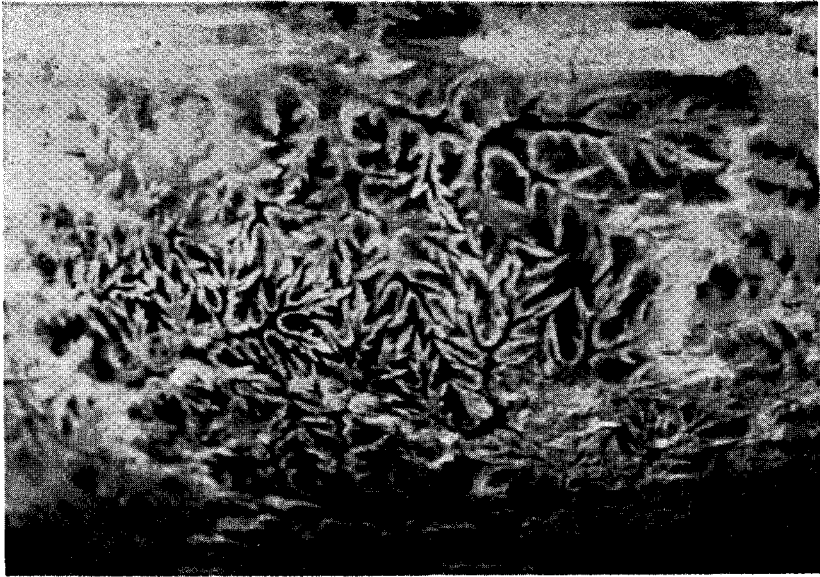


3

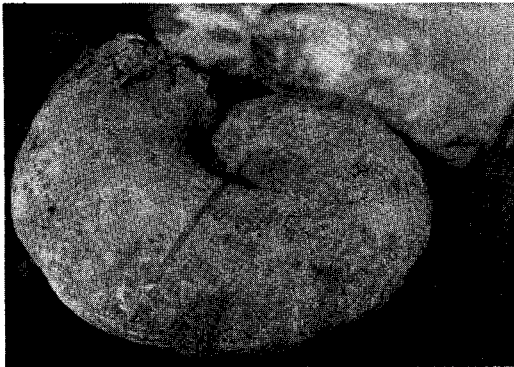


5

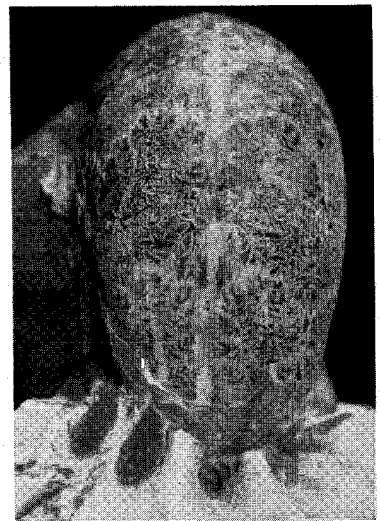
- 第2圖 玉川斷層海岸の北端 (筆者撮影)
第3圖 化石産出地點に立てる化石採集者 (")
第4圖 三崎海岸段丘 (")
第5圖 野田海岸十府ノ浦製鹽街 (")



8



6



7

第 6 圖 採集せる菊石全面 (1/12) (筆者撮影)

第 7 圖 頭足類たるを示す爲の菊石側面 (1/8) (")

第 8 圖 縫合線の豊かさを示す (1/1) (")